江戸時代の急尾焼・急須

西　村　俊　範

はじめに

熱したお湯を茶葉に注いでお茶碗に注ぐ道具としての急須は，土瓶とともに我々の日常生活に溶け込んだ喫茶道具である。しかし急須(きゅうす)という言葉が常用化したのは明治以降と比較的新しく，江戸時代語の辞典類では項目が立てられていない。現在の辞書類が拾う古い用例も明治以後のものである[(1)]。同様の形と同様の用途をもつ道具は江戸時代の中期，18世紀半ばには日本に出現していたが，当時は急焼・急尾焼などと書いて，「きびしょ」・「きびしょう」などと呼ぶことが一般的であった。しかもこの急尾焼は現在とは異なって，火にかけて中でお茶を煎じて茶碗に注ぐ道具として用いられていて，現在の薬缶と急須の用途を兼ね合わせたような道具であった。それが19世紀に入って一般のお茶が煎じ茶から現在と同じ淹茶へと移り変わる過程で次第に火にかけられることが少なくなり，ついにはお湯を沸かす機能を薬缶に譲ることになった。急須という用語はその過程で登場し，明治以降に次第に定着していったが，一方で江戸時代以来の「きびしょう」も特定の地域では現在まで併存して使用され続けており，一物二呼称の様相になっている。

筆者は過去に江戸後期の喫茶について述べる中で，この急須の類に触れていたが，あくまで時代限定的な叙述にとどまっていた[(2)]。急尾焼・急須の使用の問題は日本の喫茶史の研究の上で重要な位置を占めているので，本

論ではその呼称の問題も含めて，関連する事項全般にわたって再度の考察を加えてみたい。

1．名　　称

⑴　中国

中国では「急須」という語は日本とは逆に極めて古くから使用される。北宋・黄裳(1044～1130)の『演山集』巻1所収の「龍鳳茶寄照覚禅師」[3]詩では，「急須」に自注して「東南之茶器」としている。中国の東南の地域，現在でいえば江蘇省近辺では，急須と呼ばれるその地方独自の茶器が存在していたと知れる。一般になじみのない地方言葉ゆえの自注であろう。用途的にも詩に「はじめ蠅声急須の腹に簇(むら)がる」とあるので，火にかけて茶を煎じる道具と知れる。ただ，これが我々が見慣れた急須と同じ物品だと考えることは早計である。画像資料も含めて，棒状の取っ手を持つ今の急須の類品は北宋代に遡る例が知られておらず，北宋代の例は容器の大小・形状は様々でも，持ち手はすべて後ろ手環状の例ばかりだからである。急須はおそらくはそのうちの名にし負う急場に間に合わせられるような小型のものの名称であろう。ともかく，茶を煎じる道具として「急須」と呼ばれるものが北宋代に既に存在していたことは間違いない。

続く明代・呉郡の人・都卬の『三餘贅筆』[4]では，「呉人呼暖酒器為急須」と記す。呉の地域，すなわち現在の江蘇省近辺では急須は茶の専用器ではなく，酒を温める飲酒用具とされていた。この急須も具体的な形状や黄裳の急須との関連などはわからないが，酒器の画像資料を見る限りは，茶器とほぼ同じ器形のものが酒器としても用いられている。急須は両方の用途機能を併せ持つ汎用煮沸道具だった可能性が高い。但し，器形的には棒状の持ち手を持つ形だったとは考えられない。

一方，日本で「きびしょ」・「きびしょう」と呼ばれる容器は急焼・急尾焼などの字が当てられるが，中国の一般的な辞典類に見ない語句であり発

音である。江戸中期(宝暦期)の料理本『八僊卓燕式記』[5]には清人・呉成充が長崎港内の船内で日本人をもてなした料理の記録が残る。その中で呉成充が用いた「急焼」に中国発音を振って「きっすやう」としている。日本人が聞き取った中国音であるが，明らかに「きびしょう」との類似性が認められる。当時長崎に来航した中国船は南京(江蘇)船・浙江船・福建船中心であり[6]，この発音が18世紀当時の中国東南地域発音であることは確実である。従って，「きびしょう」・「きびしょ」という言葉は，江戸時代に長崎を経由して棒状の取っ手を持った汎用の煮沸器が日本に齎されたときに，その漢字・発音を言われるままに名称として採用した言葉と考えてよかろう[7]。

明治年間に台湾で言語の研究に従事した小川尚義氏は，台湾土語で茶出しの粗製のものに「急焼」(発音・キプシオ)と呼ばれるものがあり，多くは薬を煎じ出すのに用いていることを紹介している[8]。江戸期の長崎の状況と照らし合わせて見れば，両者に共通するキーワードは福建であり，この語は閩南語系統で使用されていた言葉である可能性があろう。

では，中国で「急須」と呼ばれたものと，「急(尾)焼」と呼ばれたものは果たして同一物の別称として良いのであろうか。ともに中国の東南部地域のものであり，煎じ茶の用途にも用いられ，その発音も現代日本人から見るとよく似て見える。しかし，言語的には「きびしょ」が「きふす」の転訛音ではあり得ないことは既に前述の小川氏や山田孝雄氏によって詳述されており，両者は異なる地域の言語とせざるを得ない[9]。少し決めつけが過ぎるかもしれないが，要するに「きふす」は江蘇近辺の言葉であり，「きびしょ」は福建・台湾の言語であって，系統を異にする言語の可能性が高いということになる。

ただ，それだからと言って「きふす(急須)」と「きびしょ(急尾焼)」のそれぞれ指し示す物体が形態的に全く別のものだということにはならない。両者が同じもののそれぞれの地域における名称ということも当然考え得る。中国における煎茶道具の時代的・地域的様相が皆目不明瞭な現状では，可

能性は残すと言えども現段階ではそれを確たる論理で語ることができない。中国において「急須」と「急尾焼」が同一物の別称か否かは現状では確認が難しいと言わざるを得ないのである。

(2) 日本

急須形の容器が日本に伝わった当初の呼び方は「きびしょ」・「きびしょう」などである。用例として確認できた古い例は，永井堂亀友「風流茶人気質」(きびしよう)[10]と北左農人「南江駅話」(きびしやう)[11]の明和7年(1770)である。以後も，類似の表記でのかなり多数の用例が継続して認められる[12]。幕末には，松平春嶽「京都日記」(慶応3年，1867)[13]にも見え，以後も現代文学に至るまで継続して用例を拾える言葉となっている。

一方で現在では主流となった「急須(きゅうす)」は日本での用例は中国と比較して極めて新しく，しかも江戸期では希少であり，6例のみを確認している[14]。滝沢馬琴「羇旅漫録」(享和3年，1803)[15]は「きうす」と表記し，松平春嶽「京都日記」が「急須」と漢字で記す[16]。上田秋成の『茶瘕酔言』[17](文化4年，1807)には「茶瓶をキビショウと呼事，急須の字(あざな)ぞと，或物知の云れたり。」と記す。上田は典拠を示していないが，急須という言葉の存在に気付いている。また，村瀬栲亭「芸苑日渉」[18]巻12(安政4年，1857)には「今人呼小茶瓶云急備焼。即急須也。須音蘇。国音呼急蘇。猶云急備焼。蓋唐音之転訛耳。」と記し，さらに前述の「三餘贅筆」なども引用している。おそらくは19世紀の時点で，きびしょう・きびしょなどという長崎来航の中国人から聞いた発音はきゅうすの地方訛りの発音であるという共通認識が広まっていたものと思われる。すなわち北京官話(マンダリン)と閩南方言，日本的に直せば標準語と福建弁の違いという認識である。これが「きゅうす」という「訛っていない」発音の普及に一役買った可能性があろう。

但し，前項で示した通り，この認識は全くの誤りであり，村瀬の説は誤謬である。18・19世紀の中国に「急須」と呼ばれる容器が存在したのか，

それが「きびしょう」とよばれたものと同一物なのかは遺憾ながら確認できていない。したがって，日本における「きゅうす」という用語の使用は確たる根拠を全く持たない極めて軽率な用法としか言えないのである。繰り返すが，誤用の可能性は高く，横手棒状の持ち手を持つ煎茶道具が中国において「急須」と呼ばれたことを示す確証は存しない。

2．中国での使用

名称の問題はひとまず置いて，中国において急須形の棒状の取っ手のついた容器の使用が具体的にどこまで遡るかを確認したい。これは「急須」という言葉の存在とはまた別の問題となる。古い例としては，1690年に沈没したと推定される沈船の積み荷，通称ブンタオ・カーゴ(ベトナム・ホーチミン歴史博物館蔵)の中に含まれるものがある。[19] この沈船自体は福建船と推定されている。使用形態から見ると，横手棒状の取っ手を持つ急須形のものは涼炉の上にのせて液体を煮沸するための道具だったと考えられる。しかも，貿易用の積み荷に比して引き上げ量が圧倒的に少ないことから，福建の船員たちの生活容器と推定されている。

このような福建ローカルと考えられる器物が長崎に来航する福建船でも船員たちによって同様に使用されていたことは想像に難くない。事実，長崎市万才町遺跡からは正確な年代は不明の物ながら類品が出土している。[20] 前述の「八僊卓燕式記」はまさにその文献的証左といえる。但し，八僊卓燕式記での急焼の用途は明らかに湯沸かしであり，茶を煎じる用具として使ったという証明にはなっていない。一方，木村蒹葭堂は「巽斎筆急須図」に横手のキビショウを描いて，「煎滾水泡茶用福建出産　鄧元禄　急焼」と傍書する。[21] また森達也氏も現代の福建省莆田市で類品が涼炉の上にのせて種々の液体を温める用途に用いられている例を報告している。[22] 時代を通じて，福建でこの急尾焼形の器物が茶も煎じる道具であった可能性は高いのである。

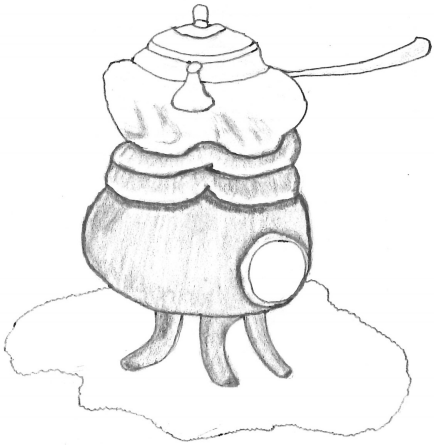

図１　丁雲鵬（1547～1628）「玉川煮茶図」より
西村作図

知人から委嘱を受けて長崎で輸入物の煎茶器を物色していた田能村竹田が，報告の手紙に「急尾焼は少き方に御座候。」と述べていることも，急焼が主たる輸入品としての扱いのものではなかったことを示していよう。[23] 文政10年（1827）の時点では，のちに総じて文政渡りと称されるような大量の急尾焼の輸入はまだ始まっていなかったと思われる。

ただし，棒状の取っ手を持つ喫茶用の湯沸かしは，中国で必ずしも福建省の特産だったとは言い切れない部分がある。明・丁雲鵬（1547～1628）「玉川煮茶図」[24]（図１）や同じく明・陳洪綬（1598～1652）の「停琴品茗図」[25]や「隠居十六観のうち譜泉」[26]などでは，棒状の取っ手を横手か後ろ手に付けたかなり大型の容器が涼炉の上に架けられて茶が煮られている。丁雲鵬は安徽・休寧の人，陳洪綬は浙江・諸暨の人である。いずれも日常品ではなく文人たちの喫茶の場面での用品であるが，類品は広く東南部地域において使用されていた可能性を残して考えておくべきであろう。そして今のところこのような文人煎茶の場面でのみ，煎じ茶に急須形の容器が使われる確実な例が認められる点も留意しておく必要があろう。ただ残念ながら当時これがどう呼ばれていたのか，その呼称は確かめられれない。

3．日本での使用の始まり

次に日本での急尾焼の使用の開始時期の問題を検討したい。

急尾焼を用いた最古の確実な実例としては，売茶翁が用いたものがあげられる。通称売茶翁と呼ばれる黄檗僧・高遊外(月海元昭)は享保20(1735)年から宝暦5(1755)年まで，京の町中を巡って煎じ茶を売り歩いた記録が残る。売茶翁の志を慕った人々が多くあり，その煎茶道具は池大雅や木村蒹葭堂などの手を経てかなりのものが現存している。売茶翁の記事が載る伴蒿蹊『近世畸人伝』[27]（寛政2年，1790)には，風炉の上に乗る横手棒状の取っ手を持つ「急焼」(傍題)が描かれている(図2)。木村蒹葭堂は売茶翁の煎茶道具を多く集めたり模造したりして『売茶翁茶器図』[28]（文政6，1823)を残す。そこに見える急尾焼も同一形のものである。売茶翁はこれを単なる湯沸かしではなく，茶を煎じる道具として使用したことは確実である。これが茶を急尾焼で煎じたことを明証できる今の所最古の例となる。その意味で売茶翁の存在は極めて重要である。以後の日本では明治時代に至るまでこの翁の手法が煎じ茶造りの手法として引き継がれてゆくからである。

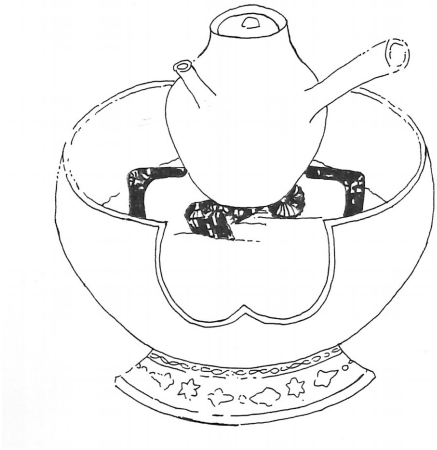

図2　伴蒿蹊『近世畸人伝』巻2(寛政2年，1790)より西村作図

売茶翁は長崎に近い肥前・佐賀の出身であり，しかも黄檗宗の禅僧として黄檗文化に親しんでいる。当時翁の周辺でこのような煎じ茶の手法がす

でに普及していたのか，あるいはこれが中国式に倣った翁の独自の手法だったのかは明確でない。田能村竹田が森荊田に宛てた書状[29]（文政10年，1827）では，当時長崎在住だった竹田が清人（福建省漳州出身）から茶書を贈られて翻刻した際の感想として，「売茶翁（高遊外）の急尾焼・風爐の煎方も，真に唐の通りは参り兼ね候」と書き送っている。竹田は売茶翁の急尾焼と風爐を用いた煎方は当時の中国の主流のものの引き写しではなく翁独自のものだと認識していたふしがある。竹田の視野に入るような中国の文人レベルの喫茶法では，急尾焼は湯沸かしであり，茶はすでに淹茶であり，茶を煎じる道具としては使っていなかったと思われる。ただ，中国在地の庶民レベル，一般日常的喫茶方法では如何だったかという問題は依然として残るが，1822年に厦門を出港してスマトラ島沖で沈没したテク・シン号の引き上げ品を見ると[30]，横手棒状の取っ手を持つ湯沸かしが大量に含まれており，茶葉を淹れる茶壺は後ろ手環状の取っ手を持つ茶銚形のものが専ら使われていた。淹茶が広く日常化していたのが当時の福建の喫茶状況だったと言えよう。

日本での急尾焼の使用問題に触れる時に常に取り上げられる話がある。煎茶に用いる「キビショウ」という器を高芙蓉が検出して池大雅に語り，喜んだ大雅がこれを印刷して煎茶愛好家に配って知らせたという有名な故事である。「蒹葭堂雑録[31]」（安政３年，1856）に収載される（本文は「煎茶に用ゆるキビショウといへる器を高芙蓉の撿出して大雅堂に語られしが，殊に歓びて，是を同志の徒に知しめんとて，其事を上木し弘められしぞ，風流の深切といふべし。」）。その図（図３）には上に横手棒状の取っ手を持つ急尾焼の器形が描かれる。形は前述の福建のもの，そして売茶翁形のものに近い。その下には，「急焼　又名　宜興鑵」とあり，前述の『八僊卓燕式記』に見える急尾焼の用例を高芙蓉が撿出したと記される。この図に続いて「雑録」には「右に次て丙子冬十月大雅堂印施と有此。丙子は宝暦六年にして大雅山人三十四歳高芙蓉は三十五歳の時なり」と記されている。わずか漢字十文字分（丙子冬十月大雅堂印施）を何故一緒に翻刻しなかったのか不可思議に思われ

るが，おそらくはその十文字は木村兼葭堂の加筆だったのではなかろうか。不思議と云えば，急尾焼図の下の記載もまた奇妙なもので，『八僊卓燕式記』の「燕」が抜け落ちている。さらに宜興鑵が急焼の別名であるかのように記しているが，実際の『八僊卓燕式記』では両者は別物として扱われている。その本文では句読点を入れずに記すと「……風炉に急焼をかけて湯を沸す宜興鑵と云茶だしに茶を入れ……」となっている。この宜興鑵は正しくは後ろの茶出しのほうにかかる言葉で，確かに文の切り方を誤るとうっかり誤読しやすい表現になっている。正しくは急焼は湯沸かしであり，宜興鑵という名前のものが茶入れ(茶注ぎ)として用いられているのである。(32)

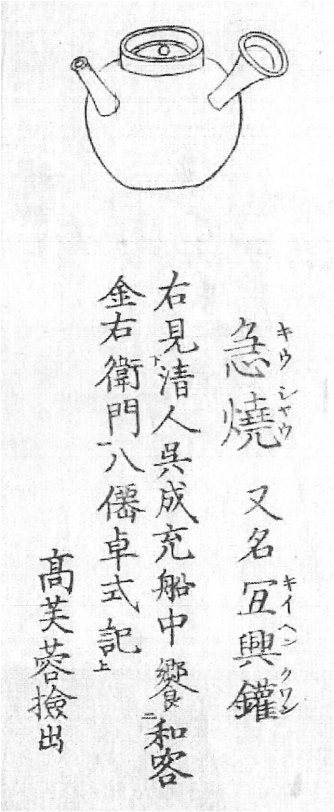

図３　急焼の図
暁鐘成「兼葭堂雑録」巻一
国立国会図書館蔵

また『八僊卓燕式記』では，急焼のフリガナは「キッスヤウ」であって「キウシャウ」ではない。宜興鑵も「ニイヒンクワン」であって「キイヘンクワン」ではない。またこの印刷物は丙子すなわち宝暦６年(1756)の印行と原図に記されているはずであるが，『八僊卓燕式記』は宝暦11年の序と宝暦９年の跋がついており，宝暦６年時点では刊行されていないはずである。前述の売茶翁は宝暦５年まで京での茶売りを行っていた。池大雅は売茶翁とも親しく，翁の死(宝暦13年)に臨んでその急焼の遺贈を受けている人物である。高芙蓉も当時は京在住で売茶翁と親しかった。二人が揃って売茶翁の急焼を知らなかったとは考えられない。従

って，高芙蓉が「撿出した」のは，急焼という器物そのもののことではなく，「急焼を宜興鑵と呼ぶ用例」を『八僊卓燕式記』に「撿出(みいだ)した」という意味かと思われる。『八僊卓燕式記』には挿図はない。

これは誤読なのであるが，誤読が起った背景には，「急焼」の字面・発音が風雅に欠ける点に不満があり，別の呼び名を探していて逸りがあったからではなかろうか。多くの間違いのもとは池大雅が『八僊卓燕式記』を読まずに受け売りで印刷したためであろう。丙子(宝暦6年)という年は売茶翁が売茶生活を止めた年であり，蒹葭堂に何らかの思惑が働いての表記ではなかろうか。いずれにせよこの記事は単純な誤解の連鎖から生じたもので，それに気付いた時点でこの話は沙汰止みにすべきものだったはずである。ただ，何らかの意味で売茶翁の動向に関連して生じたものであり，急尾焼が全く普及していない時代に，煎茶愛好家に急尾焼という器物を強く印象付ける役割は果たしていたと考える。

4．以後の日本での使用

前章で述べた売茶翁を嚆矢として，急尾焼は喫茶用具として日本に定着してゆく。その様相を具体的に追って見てみたい。

篠部実成(楽水居主人)の『煎茶略説』[33]（寛政10年跋，1798)の「小砂罐(きびしょう)」の項には，「高翁在世の時の陶工三七・金七ともに宝暦の頃の良工なり」という記述がある。同様の京の陶工の記述は『煎茶早指南』[34]（享和2年，1802)や『煎茶綺言』[35]（万延元年，1860)にも認められる。当時すでに相当の国産模倣品が存在していた事が考えられる。蓼太編『七柏集』[36]（天明元年，1781)には「茶漬支度の焜炉急火焼(せきたく)」という句もあって，お茶漬け用の茶にまでも使われた。日本でもかなり早くからこの手の急尾焼の類品が模製されていたことが知れる。

千代丘草庵主人の『讃極史』[37]（寛政7年～，1795)には，上等の遊び人たちの会話が記される。「これは遠来妙だ。御せんじちゃをねかへやす。」「幸

い今いれやした御心まかせに(と，なにはのけんか堂好みのきびしょうをそのままそばへやる)」「これはよい茶た蘭茶でもねへ。こそ製かな。」「いやいや日本の宇治さ。」「名はなんと云の。」「喜撰といいやす。せんしちゃの一さ。喜撰の新ときては煎茶家のひねる所さ。折鷹雁金もよいが喜撰にや及ばねへ……」。相当上等の茶葉が使われたらしい。急尾焼は「なにはの蒹葭堂好みの」とあり，これはもともと「煎茶家がひねる」ものだったと理解されていた。しかもそのきびしょう自体が茶を煎じる道具として使われたことが文章表現上明確である。このきびしょうの取っ手が横手か否かは明確ではないが，「蒹葭堂好み」という以上は横手であろう。蒹葭堂発祥すなわち上方発祥と認識されていたきびしょう，それが追々一般にも普及したと思われる。つまり，売茶翁が横手の急尾焼を使用したことが文人煎茶の煎茶家たちに受け継がれ，その積極的な啓蒙活動によって，一般民衆が常用する器物へと拡大していくという流れがあったことが見て取れる。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』六編上[38](文化4年，1807)には淀川の下りの乗合船の船中に置かれた急尾焼の話が出てくる。一九は急尾焼を「今江戸にてもたまさか見えたり。」と記しているので，上方での先行しての普及があるものの，江戸では未だしという普及差だったと想定できる。まさに整合する記述と言えよう。

滝澤馬琴の『羇旅漫録[39]』(享和3年，1803)には，「京都の陶は，粟田口よろし。清水はおとれり。白川橋に松風亭といふ店あり。大坂蒹葭堂好みのこんろきうす等を製す。」とあり，国内産の急尾焼ははじめ京焼が中心だったと思われる[40]。本間遊清の『耳敏川[41]』(文化12年，1815)にも「秋成は茶を好みて，粟田口のこんろきびせうは秋成より初て造りて世にひろまりしといふ。此の焼物の茶碗などに老人の杖にすがりてたてる形あるは，則秋成といふ。」とある。文化人・煎茶家たちの積極的な関与を急尾焼の製作にも認めるべきであろう。

田能村竹田の『石山斎茶具図譜[42]』(天保2年，1831)には「村瀬栲亭翁茶を嗜む。予に語って曰く，初め無腸老人(上田秋成)と謀り，清六(清水六兵

衛)をして初めて急尾焼及風爐を造らしむ。当時茶を好む者甚だ罕(まれ)なり。一，二十年来，輦下(京)より延(ひ)いて民間田舎に至るまで，家として茶具を備へてもって過客を待たざるは無きなり。……爾後名手競へ興り，木米老人(青木木米)及び道八(高橋道八)久太諸名家の如き，清雅巧緻，名一世に藉く。」と記す。また，『屠赤瑣瑣録』[43]（天保元年，1830）にもほぼ同様の文で「今世間に流行する煎茶も，先生(村瀬栲亭)，餘斎(上田秋成)両人して図を製し，其頃陶工清水六兵衛と云ふ者に命じて作らしむ。彼是と世話して漸く出来す。纔に十二三年計の事なり。今は三都を始め，田舎まで行れて，片隅の怪しき茶碗店まで，急焼風呂を沽(う)らざるはなし。夫故餘斎六兵衛方にて茶器を取れば，価に及ばず，餘斎のかげにて如斯に流行して，誠に多くの益を得しゆへ也。」と記している。急尾焼の流行ぶりが窺える。天保元年から12・3年前は，文化末・文政初頃に当たる。それはちょうど深田精一が湯沸かしと茶を作る急須が分かれた(つまり茶が淹茶になった)時期としてあげた頃とまさに符合する[44]。「急尾焼風呂」はひっくり返して「こんろきびしょう」という語呂の良い言葉として18・19世紀の文献に頻出する。殆どワンセット扱いであり，急尾焼が焜炉の上に乗って一般家屋内に描かれる多数の画像資料の状況とも合致している。清水六兵衛が横手急尾焼の販売の立役者として上田秋成に恩に着ていたことも，横手急尾焼が文人煎茶と煎茶愛好家から出たことを如実に示すものであろう。その意味で，彼らはまさしく売茶翁の茶の正統な後継者たちだったのである。一方で土瓶・薬罐が涼炉の上に架けられている画像は極めて少ない[45]。土瓶・薬罐と急尾焼では容量にも差があるはずで，涼炉の火力との兼ね合いが気になる。これが本来の形ではなく，土瓶・薬罐はある意味急尾焼の代用品だったという見方もできよう(図9参照)。

また，日本での急尾焼の使用は，必ずしも茶に限定されたものではなかった。本家の中国と同様に，急尾焼は液体を温める他の用途にも用いられた[46]。漢方薬を煎じたり，酒のお燗に用いられている(図4)。もちろん画像で確認できる数は極めて限られていて，茶が使用の中心であったことには

図４　(左)式亭三馬「無而七癖酩酊気質」巻上(文化３年，1806)
早稲田大学図書館蔵
(右)芝全交「絵本風雷神天狗落種」上冊(天明２年，1782)
国立国会図書館蔵

変わりはない。

５．18世紀の画像資料に見える急尾焼

前章までは専ら文献資料を中心に急尾焼の問題を考察した。本章では画像資料に見える急尾焼について考えてみたい。

18世紀の画像資料に見える急尾焼は19世紀における飛躍的な普及状況と比べれば極めて少ない。まだ広く一般に普及したとはとても言い難い状況だったと思われる。４章で先述した十返舎一九の『東海道中膝栗毛』六編[38]上(文化４年，1807)では急尾焼を「今江戸にてもたまさか見えたり。」と記しているので，上方での先行しての普及があるものの，江戸では未だしと

表１　画像資料に描か

No.	年　代		持ち手		置かれる場所	出版地 作者出身地
	元　号	西暦	形状	位置		
1	明和３	1766	棒	後	風炉上(塔形)	上方
2	明和７	1770	棒	後	風炉上(塔形)	上方
3	明和７	1770	棒	後	単独	上方
4	明和８	1771	棒	後	風炉上(塔形)	江戸 (上方)
5	安永４	1775	棒	後	風炉上(塔形)	江戸
6	安永８	1779	棒	後	風炉上(塔形)	江戸
7	安永９	1780	棒	後	瓶敷上	江戸
8	安永９	1780	棒	横	火鉢上	上方
9	安永９	1780	棒	後	風炉上(塔形)	江戸
10	安永９	1780	棒	後	瓶敷上	江戸
11	安永９	1780	棒	後	風炉上(塔形)	上方
12	安永末	～1781	棒	後	瓶敷上	江戸
13	天明元	1781	棒	後	風炉上(塔形)	江戸
14	天明２	1782	棒	？	火鉢上	江戸
15	天明４	1784	棒	？	風炉上(塔形)	上方
16	天明４	1784	棒	後	火鉢上	江戸
17	天明４	1784	棒	後	瓶敷上	江戸
18	天明７	1787	棒	後	火鉢上	江戸
19	安永～寛政		棒	後	火鉢上	江戸
20	寛政元	1789	環	後	(店の棚)	江戸
21	寛政４	1792	棒	後	風炉上(塔形)	江戸
22	寛政４	1792	棒	後	瓶敷上	江戸
23	寛政頃		棒	後	風炉上(火鉢形)	上方
24		1790年代	棒	後	風炉上(塔形)	上方
参考	天明２	1782	棒	後	火鉢上	上方

れた急尾焼(18世紀)

文　献
上田秋成『諸道聴耳世間猿』(明和3年，1766) 古谷知新『滑稽文学全集』第3巻所収(1918年)78頁
永井堂亀友『風流茶人気質』(明和7年，1770) 大橋新太郎編『校訂気質全集』所収(1895年)459頁
与謝蕪村筆「急須図」(題名は後世のもの) 尾形仂ほか編『蕪村全集』第6巻(1998年)389頁図13
八文字屋自笑『役者歳旦帳』(江戸)(明和8年，1771) 歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第2期第10巻(1992年)101頁
勝川春章『豆談語』(安永4年頃，1775) 武藤禎夫編『安永期艶笑噺本六種』所収(2000年)77頁
恋川春町『金銀先生再寐夢』　国立国会図書館蔵
北尾政演(画)『遊人三幅対』上巻　国立国会図書館蔵
『帰命曲輪文章』絵尽し第3帖(安永9年，1780) 歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳集成』第41巻(2003年)455頁
神真人序『大御世話』(安永9年，1780) 武藤禎夫他編『噺本大系』第11巻所収(1979年)264・265頁
木鶏『山主我独』(安永9年，1780)(『叢』第21号，1999年)218頁
三代目吉文字町屋市兵衛編『女芸文三才図会』五編(安永9年，1780) 小泉吉永編『江戸時代庶民文庫』第1(2012年)503頁
松村屋弥兵衛(刊)『自在餅』 武藤禎夫編『噺本大系』第17巻(1979年)221頁
伊庭可笑『文雅講釈』　国立国会図書館蔵
市場通笑『絵本談芭蕉誉詞』中冊(天明2年，1782)　国立国会図書館蔵
柏原屋清右衛門『女万歳宝文庫』(天明4年，1784) 江森一郎監修『江戸時代女性生活絵図大事典』第7巻(1994年)227頁
『一の富見得の夢』絵外題(天明4年，1784) (東洋文庫編『青本絵外題集Ⅰ』岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉別巻上所収，1974年)400頁
南仙笑楚満人『八橋調の流』　国立国会図書館蔵
石川雅望『絵本古今狂歌袋』(天明7年、1787)　国立国会図書館蔵
黒木『女荘子胡蝶夢魂』　早稲田大学図書館蔵
寿亭主人『鸚鵡返文武二道』中巻　国立国会図書館蔵 棚橋正博ほか注『新編日本古典文学全集』第79巻(1999年)160頁
山東京伝『天剛垂楊柳』上巻 山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集』第3巻(2009年)84頁
武光散人『蒲公英経』上巻　国立国会図書館蔵
堤正敏『商道九篇国字解』三之巻 瀧本誠一編『日本経済大典』32巻(1929年)596頁
岡田米山人筆「山水人物花卉図屏風」 『文人画粋編』第15巻(1988年)85・87頁
芝全交『絵本風雷神天狗落種』上冊　国立国会図書館蔵

いう普及差だったと想定できる。

急尾焼の画像を，売茶翁関連の画像を除いて24点確認している。表１の通り，最もさかのぼる例は明和３年(1763)のもので，売茶翁存命時代にまで遡る例は今のところ見いだせていない[47]。また，上方・江戸という仕分けでいえばあまり差がない。これは画像のすべてが急尾焼がいち早く普及するはずの文化の川上に位置する文化人・富裕町人層に関わるものであることが理由であろう。

分析してみるとその画像表現には際立った共通性が認められる。NO6が遊郭であるのを除いて多くが一般家屋の部屋内に表現され，多くが形は様々ながらも焜炉類の上に置かれ，多くが取っ手が後ろ手棒状に表現されている。用法としては，NO2のみが少し特殊で，茶道の野点の際の湯沸かしとして使われており，それ以外は茶を煎じる煎茶道具として使用されていることは間違いない。この点でも売茶翁の用法と共通している。箱火鉢が一般化する寛政期以降までは急尾焼は焜炉・火鉢の上にのせて使用するのが唯一の使用法で，焜炉と急尾焼はほとんどワンセットの用具だった。次に，持ち手の位置が明瞭に横手のものはNO8の１例しかない(図５－５)。注ぎ口の表現が画面上から隠れたりしているNO10・11の２例についてはまだ横手の可能性が残るが，それ以外はすべて持ち手は横手ではなく後ろ手につけられていることが明瞭である。形態的に後ろ手と横手の弁別の難しい例も存在するが，一応の基準として，胴体の側線に取っ手が付くように見えるものを後ろ手，その側線の内側で胴体に取っ手の接着部が見える形のものを横手と仕分けている。

売茶翁の所持品に後ろ手はない。これは際立った相違点と言える。ここまで画像表現が共通するということは，これが写実的で意識された表現であったことを示している。この後ろ手の急尾焼は次章で確認する通り，決して18世紀だけに認められる特異なものではなく，幕末期までは急尾焼表現のむしろ主流を占める。初期の急尾焼は，取っ手が横につくいわゆる「売茶翁形」ではなかった。これは取りも直さず一般に普及した急尾焼を

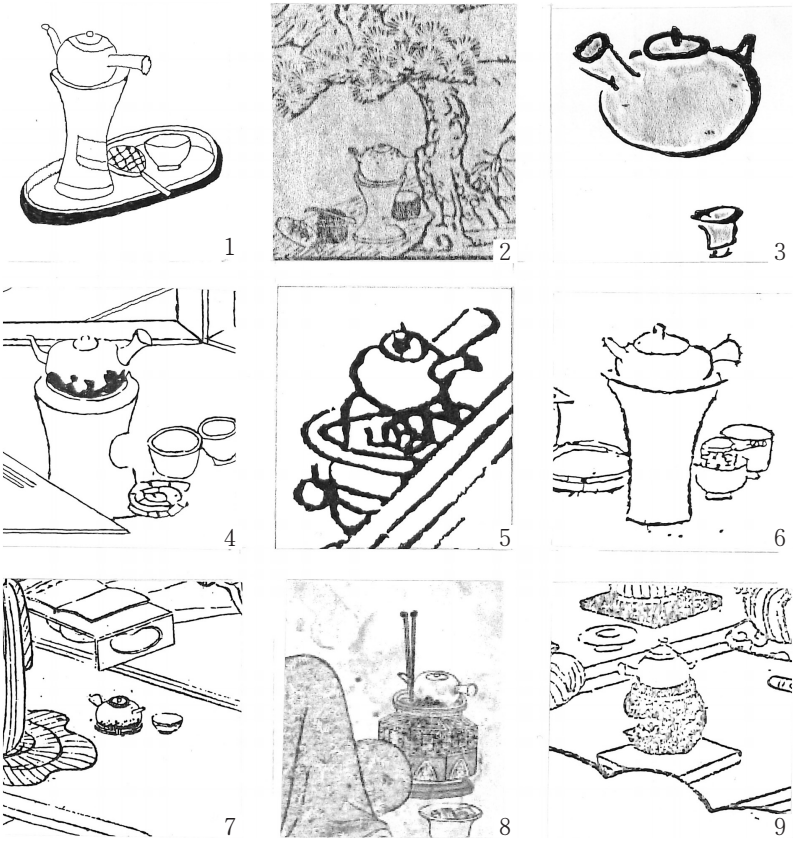

図５　18世紀の急尾焼
１．上田秋成「諸道聴耳世間猿」５之巻 明和３(1766)年より西村作図
２．永井堂亀友「風流茶人気質」巻５ 明和７(1770)年　国立国会図書館蔵
３．与謝蕪村筆「急須図」より西村作図
４．勝川春章「豆談語」　安永４(1775)年頃より西村作図
５．並木五瓶・十輔「帰命曲輪文章」絵尽し　安永９(1780)年より西村作図
６．神真人序「大御世話」　安永９(1780)年より西村作図
７．木鶏「山主我独」　安永９(1780)年　国立国会図書館蔵
８．石川雅望「絵本古今狂歌袋」　天明７(1787)年　国立国会図書館蔵
９．堤正敏「商道九篇国字解」巻三

図６　(左)二代梅暮里谷峨『春色連理の梅』三編巻中(嘉永４年，1851)
(右)滝澤馬琴『傾城水滸伝』五編(天保２年，1831)　大阪府立中之島図書館蔵

図７　後ろ手急尾焼(いずれも西村作図)
(左)華頂山人「普茶料理抄」(明和９年，1772)より
(中)小田海僊「備忘録」(文政元年，1818)より
(右)渡辺崋山筆「盧仝煎茶図」(寛政元年～天保12年，1793～1841)より

用いる煎茶が，売茶翁の手法の直接のコピーではなかったことを示している。

実際に，後ろ手の取っ手を手持ちしている画像が19世紀のものながら確

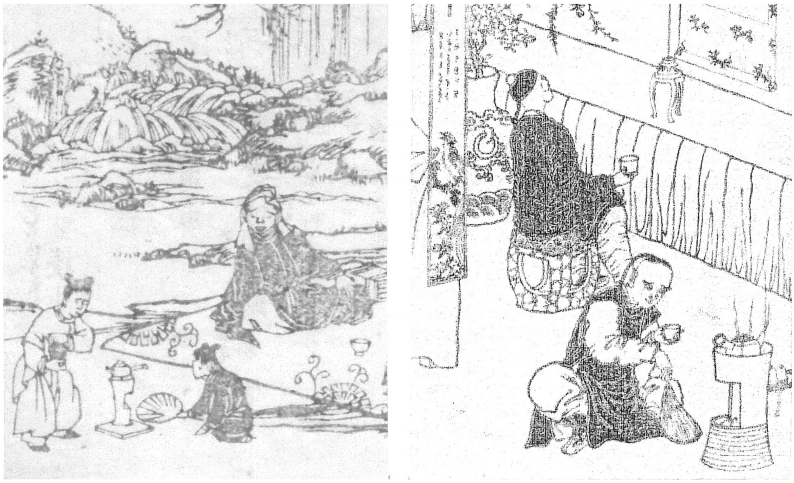

図８　後ろ手急尾焼
(左)又玄斎南可「新編異国料理」(文久元年，1861)　国文学研究資料館撮影，味の素食の文化センター蔵
(右)橋本玉蘭斎「横浜開港誌」３編(文久2年，1862)　国立国会図書館蔵

認できる。滝澤馬琴『傾城水滸伝』五編[48](天保２年，1831)と二代梅暮里谷峨『春色連理の梅[49]』三編巻中(嘉永４，1851)には後ろ手棒状の取っ手を手持ちしている姿が描かれる(図６)。ただ，取っ手を後ろに取り付けるということ自体も決して日本で創意工夫されたものだとは言いきれない。例えば華頂山人「普茶料理抄[50]」(明和９年，1772)では，かなり大型と思われるものが食事前の煮茶の間に描かれる(図７左)。棚の中の盆の上に置かれるが具体的な用途が不明確である。あるいは水差しかとも想定している。

こういう中国系の料理の場面に出るからには，中国に大小・用途は別にして同形の容器が存在したことも十分あり得る。事実，小田海僊は自筆の備忘録に「砂罐」と題して後ろ手の類品を茶具の一つとして記している[51](図７中)。並び順からみて，涼炉に架ける道具と考えられる。また，時代は天保期ごろに下るが，田能村竹田筆「山陽煎茶具図[52]」(天保３・４年，1832・33)や渡辺崋山筆「盧仝煎茶図[53]」(図７右)では，明確な後ろ手大型の

急尾焼が焜炉にかけられた絵が見える。彼ら文人たちが模倣の対象としたものが中国に存在した可能性が高い。事実，宜興窯産のかなり大型の朱泥穿心罐が長崎市桜町遺跡42号土坑から出土している。[54] 17世紀前半の煎茶道具類のうちの１点で，火にかけた痕跡があり湯沸かしかと推察されている。幕末期の日本での画像ではあるが，中国人が使っている画像が存在する。又玄斎南可『新編異国料理』[55]（文久元年，1861）（図８左）と五雲亭貞秀（橋本玉蘭斎）『横浜開港見聞誌』三編[56]（文久２年，1862）のもの（図８右）で，いずれも塔形焜炉の上で茶を煎じる道具として用いられている。

取りまとめれば，18世紀における急尾焼の使用はまだ初現的様相を示し，その使用は年代的に売茶翁スタイルの影響と考えて矛盾がないが，ただその手法の完全な模倣ではなかった点が明瞭だと言える。

６．19世紀の画像資料に見える急尾焼・急須

19世紀の画像資料に見える急尾焼・急須については，かつて西村2016において述べた。その時点では収集点数が乏しかったが，以後，鋭意収集に努めて表２では５倍弱にまで資料数が増えている。西村2016の表同様，細かい数字には全く意味はない。全体の傾向が留意点となる。資料数は大幅に増加したが，分析結果に特段の違いは出ていない。再度まとめて述べれば，文化・文政頃から画像数が著しく増加すること。幕末の慶応あたり以降では画像数がさらに増加してくること。急尾焼の描かれる場所が慶応ごろから加熱場所と切り離される傾向が顕著に見えること。取っ手の位置が後ろ手から横手に次第に変化し，慶応以降に逆転すること。などである。この背景に庶民層も含めてお茶が次第に煎じ茶から淹茶へと切り替わっていたことがあげられる。別表現でいえば，急尾焼の増加自体が淹茶の普及の反映といえる。発掘結果でも，火にかけない急須は明治以後に顕著に見えるようになるとされる。[57] 画像資料の分析ともおおむね符合するといえる。もちろん，火にかけない急須の初現自体はもっと遡る。清談楼主人『新撰

表２　画像資料に描かれた急尾焼・急須(19世紀)

年号	西暦	把手の位置		計	描かれる場所			計
		後	横		炉の上	箱火鉢の上	瓶敷の上	
享和 文化	1801 〜 1818	53	7	60	50	3	5	58
文政	〜 1830	25	9	34	24	6	3	33
天保	〜 1844	34	18	52	32	4	15	51
弘化	〜 1848	18	5	23	13	1	8	22
嘉永	〜 1854	32	11	43	18	3	22	43
安政	〜 1860	27	3	30	15	1	17	33
万延	〜 1861	9	2	11	6	1	5	12
文久	〜 1864	19	3	22	14	0	9	23
小　計		217	58	275	172	19	84	275
元治 慶応	〜 1868	11	9	20	3	2	19	24
明治 10年まで	〜 1877	18	33	51	6	6	36	48
明治 10年代	〜 1887	50	65	115	11	11	88	110
明治 20年代	〜 1897	12	30	42	0	1	30	31
小　計		91	137	228	20	20	173	213
総　計		308	195	503	192	39	257	488

図９　歌川芳晴(画)「若衆振由縁色揚」
(嘉永３年序，1850)国立国会図書館蔵

煎茶一覧[58]』(弘化４年，1847)には，胴に図柄を描いた「染付物　今世専ら用ゆ」と題のある急須や金襴手の尾形周平の急須，中国製で図柄の入るものも見られる。文献にも山々亭有人『春色恋廼染分解[59]』(文久２年，1862)には「鍋島焼のきびしやう」という言葉が登場する。これらは専ら図９に示す[60]ような現在の急須と同一の用法で使用されることが前提となって作られてきた器物であろう。

また，横手の急尾焼の初現資料として，西村2016では式亭三馬の『任侠中男鑑』(文化13年，1816)をあげていたが，前章の通り18世紀に１例を見出し，19世紀でもさらに遡る例として四宮仲宣『東牖子[61]』(享和３年，1803)と魚屋北渓『書き初めの図[62]』(文化２年，1805)を見出している(図10)。

大坂・浜松歌国(布屋清兵衛)(文政10年没，1813)の『摂陽奇観[63]』は年代記の体裁を取る。その中で浜松が「煎茶流行」を記事にした年が２か所ある。一か所は明和元年(1764)で，江戸での流行に２・30年遅れて大坂でも煎茶が広まり始めたことを示している。但し，上田秋成は『茶痕酔言[64]』で「煎茶の行はる々事，……ここ(大坂)には寛保(1741～44)より遊外子に行われ，京師に先開けたり。茶器は皆唐山の新製にて，古物を好まず。」と記す。二つを整合的に解釈すれば，煎茶愛好家の間での普及と一般への普及の時間差と解せよう。二つ目の「煎茶流行期」は19世紀初頭の享和３年(1803)

図 10　横手急尾焼
(左)「東牖子」巻四(享和 3 年，1803)
(右)魚屋北渓「書き初めの図」(乙丑，文化 2 年，1805)
橋口清「浮世風俗やまと錦絵」江戸時代末期上巻(大阪府立中之島図書館蔵)第13図より

で，「近世雅俗ともに専ら好めり。煎茶式の小冊出版す。」と記す。煎茶の流行が顕著となり，喫茶の作法(セレモニー)化が始まっていることを示している。陸可彦『素人包丁』[65]（文化 2 年，1805)にも「飯を食し終らは膳酒ともに引取干菓子にて茶をすすむ。薄茶の点じ出しよろしかるべし。又当時流行の煎茶もよし。」と，雅のみならず俗っぽい所でも煎茶に一定の存在感があったことを記している。19世紀に入ったあたりが煎茶流行の始まりだったことは確実と言えよう。これもまた画像分析の結果とも整合している。

但し，その煎茶にはまだ煎じ茶と淹茶が両立していた。和田信定『臨時客応接』[66]（文政 3 年，1820)には「庵(淹)茶にても煎茶にても薬罐急火生(急

尾焼)の類へ先少しばかり水を入れ，湯の沸立間に片脇にて茶を焙ずべし。……庵茶は激し湯にて先外の茶碗へ一扁漉し，二扁目を客人の茶碗へ程よく漉，前の通蓋をして納敬へ載せべし。煎茶は湯の激し所へ入れ早く蓋をして置程よく茶漉の上より茶碗へつぐべし。」と記す。まさに併存である。また，頼山陽が橋本元吉に宛てた書状[67](文政12年，1829)では「茶の入様は，此すやきのきびしょに而，湯を活火にて沸せしめ，湯気のくちより一條出候時，今一つのきびしょをうつむけて，上に蓋にして中をあたため，引上て其中に茶を入，手早く右之湯を中へ注し，蓋をしてしばらく置て茶碗にあければ，真の茶靡色を成し候也。」と記す。完全な淹茶の手法であるが，山陽も急須という言葉は用いておらず，湯沸かしと茶注ぎを使い分けてはいるものの，同一の呼称できびしょと呼んでいる。このように深田精一が『木石居煎茶訣[68]』で「ユワカシとキビショウも素より一物なれど，三四十年来淹茶おこりてよりユワカシとキビショウと二物のごとくもてはやす俗習となりぬ。」と記す通りの事が起ったために，同じ呼称で呼んではややこしくなり，そのためにきびしょうの名前は次第に茶を淹れる道具の方の専用の呼称にシフトしたと考えられる。しかし，ユワカシとキビショウを一体として用いる煎方もこの当時には同時併存している。この呼称の紛らわしさも急須という新しい別の呼び名が普及した一要因となったであろう。要するに，淹茶専用具に変わっても急尾焼の名を踏襲し続け，それをさらに急須と呼び変えたことが問題だったのである。

一旦定着してしまった言葉のイメージは容易には拭い去れない。それを避けるためには新たな言葉を用いることは極めて有効である。たとえそれが厳密な意味では不正確な用法であってもである。松平春嶽『京都日記[69]』が慶応３年(1867)の条に将軍との用談の後の事として「誠に御うちわにて，跡には御きひしうへ御茶入り，御急須小茶碗にて被下。」と記している。これは表現がわかりにくい。編者はこの「きひしう」に「急須ヵ」と傍注を振るが余計ややこしくなる。これは，前半が居室で急尾焼と焜炉を用いて茶を淹れるという従来方式だという常識的一般的表記であり，後半がそ

の中でも急須内の茶葉にお湯を注ぐ特に新しい淹茶方式だという具体的現実的表記ということかと考える。慶応という幕末の時代の茶の在りようを如実に示して重要である。

なお，福沢諭吉『文明論の概略』（明治 8 年，1875）[70]・スマイルズ『西国立志編』（明治 9 年，1876）[71]では，「急須」という言葉が「喫緊のもの」という意味で，茶とは無関係の形で使用されている。現在ではなじみのない用法であるが当時は「急須」という用語はまだ目新しく，いわば生きて流動している言葉だった。現実の用途と文字面から受ける意味がかなり乖離した目につく言葉と認識されたであろう。辞書では「和英語林集成（初版）」（慶応 3 年，1867）に「kibisho，キビショ（当てる漢字なし）」と「kiusz，キウス（球子）」が両方掲載されており，同じく「和英語林集成（再版）」（明治 5 年，1872）では「kiusu，吸水」で掲載されており，「kibisho」が類語としてあげられ，「kibisho，キビショ（当てる漢字なし）」も単独で項目となる。[72] 漢字の当て方も定まっておらず，言葉としてまだ不安定な様相が窺える。明治 8 年出版の『商業小学取引要文』[73]には，瀬戸物屋にともに後ろ手棒状の持ち手を持つ「九谷急須」と「萬古急須」，道具（骨董）屋に「急須　孟臣造」としるす宜興の環状後ろ手の「急須」が描かれている。完全に淹茶道具は漢字表記が「急須」となっている。河竹黙阿弥「勧善懲悪孝子誉」（明治10年，1877）[74]にも「急須茶碗」の語句で登場している。

急尾焼を茶を煎じる用途に用いる売茶翁流の手法の普及の地域差の問題は，現状では手掛かりが乏しすぎる。内藤官八郎「弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄」[75]は弘前では専ら陶瓶が使用され，「きびてう」（と花瓶涼爐）の使用は嘉永末年（～1854）からと記している。これなどは時期的には江戸などよりもかなり遅れていると言わざるを得ない。

7．茶 注 ぎ

最後に特殊な急須形の容器の例を挙げたい。7 例確認している（図11）。

(1)　歌川国貞(五渡亭)「大津絵つくし　げほうの頭剃り」[76]　文化年間
(2)　曲山人　「仮名文章娘節用」三編上[77]　天保元年(1830)
(3)　三文舎自楽「娘消息」初編上之巻[78]　天保5年(1834)
(4)　為永春水「孝女貞婦娜真翳喜」初編下巻[79]　天保年間(1830～44)
(5)　初代歌川広重「名所江戸八景　高輪の秋月」[80]　弘化年間(1844～48)
(6)　歌川貞景(五湖亭)「美人図」[81]　弘化年間
(7)　笠亭仙果「古今草紙合」六編下[82]　嘉永4年(1851)

いずれも円筒形の容器に取っ手と注ぎ口が付き，取っ手は急尾焼のような先端の膨らみがなく，かなり細長い棒状をしている。図11左上では取っ手の付け根に取り付け金具のようなものが見える。図11－右上・左下はともに着彩図で，取っ手は本体とは別の黒い色で表現される。木製か漆製の可能性が高い。蓋は被せ蓋らしく本体より一回り大きく，中央に二本線があるのであるいは半開きにできる設えかと思われる。

19世紀に入って淹茶が普及するようになると，直接火にかけない「急須」が登場する。火にかけないのであれば，何も素材が焼き物である必然性はなくなる。焼き物の急須よりも軽くて扱いが簡便な特に茶店で便利な道具として生まれたものであろう。当時の呼び名は不明である。18世紀の文献では「茶出し」[83]と呼ばれる道具が見えるが，「茶出し」は固有名詞というよりは普通名詞に近く，これ専用の固有の名称と捉えて良いかは不明である。

終わりに

以上，急尾焼・急須と我々が呼び習わしている器物について全般的に論じてみた。確かな結論を得られない部分も多かった。其の主たる原因は中国における資料が断片的で，同形品の時代的・地域的変遷がいまだ明確でないことにあり，副次的原因は日本のおける「急須」という言葉の誤用に

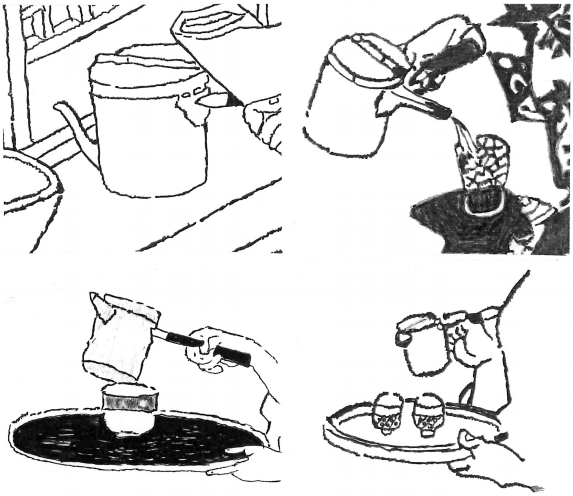

図 11　茶出し（いずれも西村作図）
（左上）歌川国貞（五渡亭）「大津絵つくし　げほうの頭剃り」より
（右上）曲山人「仮名文章娘節用」三編上より
（左下）歌川広重「名所江戸八景　高輪の秋月」より
（右下）笠亭仙果「古今草紙合」六編下より

ある。このような用語の誤用と慣用的表記が長く固定的に続いてしまうと修正はもはや困難である。なぜなら，事は学問レベルに止まらずに日常生活レベルにまで及んでしまうからである。むしろしない方がさらなる混乱を招かずに済もう。

また，18・19世紀の資料を通覧して見れば，急尾焼・急須の動向に，その時代における一般の茶，特に上茶の推移が象徴的に示されていることが見えてきた。急尾焼・急須で番茶を淹れることはまずない。急尾焼・急須は，茶の上質化を推し量る物差しであり，その意味で煎茶道具のまさに核心に位置づけられる道具と言える。

注

（1） 前田勇編『江戸語大辞典』（1974年）・大久保忠国編『江戸語辞典』（1991年）・穎原退蔵編『江戸時代語辞典』（2008年）なども項目として立てておらず，用例を拾えていない。『日本国語大辞典』（第２版，2001年）も明治の用例のみである。

（2） 西村俊範2016「江戸後期庶民のお茶」『人間文化研究』第37号（2016年）
ほかに筆者がまとめた江戸期の喫茶にかかわる論考に以下のものがある。
西村俊範2014「笠森お仙と隠元薬罐」『人間文化研究』第32号（2014年）
西村俊範2017「桃山～江戸中期，庶民のお茶」『人間文化研究』第39号（2017年）
西村俊範2018「江戸時代の喫茶道具」『人間文化研究』第41号（2018年）
西村俊範2019「江戸時代の上茶」『人間文化研究』第43号（2019年）
以後は，「西村2016」のように略して本文中に引用する。

（3） 民国教育部中央図書館籌備処選『四庫全書珍本初集　集部別集類』第1272冊11葉（民国23年，1934）
「有物呑食月輪盡　鳳翥龍驤紫光隠　雨前已見織雲従　雪意猶在渾淪中　忽帯天香堕吾篋　自有同幹欣相逢　寄向仙盧引飛瀑　一簇蠅声急須腹」
なお，この詩は明・喩政の『茶集』（萬暦41年，1613）巻中にも収録されており，日本でも文化元年（1804）に京都で覆刻本が出版されている。

（4） 高承勲輯『続知不足斎叢書』（清末）第2集第14冊８葉オモテ・ウラ

（5） 臨川書店『江戸時代料理本集成』第43（1978年）505頁。長澤規矩也解題『唐話辞書類集』第８集（1972年）505頁。奥村彪生『日本料理秘伝集成』第13巻（1985年）20頁。

（6） 西川如見「華夷通称考」巻１・２（宝永６年，1709）（小泉吉永解題『江戸時代庶民文庫』第54，2015年）参照。

（7） 森達也氏は，「これは長崎に来航した福建船の船員が水や酒を温めるのに使った急焼と呼ばれる急須形の煮沸具を，福建語でキップショウと発音したことに由来するものとされる」と記すが典拠は示されていない。森達也「唐物煎茶器―茶銚・急焼・湯罐・涼炉―について」（愛知県陶磁資料館カタログ『煎茶とやきもの―江戸・明治の中国趣味』所収，2000年）109頁。同前「唐物煎茶器―急焼・湯罐・涼炉について―中国福建とベトナムでの知見から―」『陶説』567号（2000年）32頁。

（8） 小川尚義「キビショと云う語に就て」『東京人類学会雑誌第286号』（明治43年，1910）

（9） 山田孝雄「キビショという語の来歴」『東京人類学会雑誌第289号』（明治43年，1910）

（10） 大橋新太郎編『校訂気質全集』（明治28年）所収，459頁。

(11)　洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第５巻(1979年)所収，78頁。
(12)　明和８年(1771)，きびせう・きびしやう―八文字自笑「役者歳旦帳(江戸)」，歌舞伎評判記研究会編『歌舞伎評判記集成』第２期第10巻(1992年)308・309頁。
　安永９年(1780)，きびせう―並木五瓶・十輔「帰命曲輪文章」第３帖，歌舞伎台帳研究会『歌舞伎台帳集成』第41巻(2003年)309頁。
　天明元年(1781)，せきたく―蓼太編『七柏集』，鳥居清・山下一海校注『中興俳諧集』(古典俳文学大系第13(1975年)252頁。
などの例を確認している。
(13)　慶応３年，きひしう―駒敏郎ほか編『史料京都見聞記』第３巻(1991年)446頁。
(14)　本文に記すもの以外に，四世鶴屋南北「浮世柄比翼稲妻」に「大和風炉に急須(きふす)をかけ，茶を拵えて居る。」とある。渥美清太郎編『日本戯曲全集』第12巻(1929年)526頁。椿椿山日記にも「急須」の記載がある。椿椿山『椿椿山日記』天保８年２月11日と９月26日の条。板橋区立郷土資料館カタログ『長崎唐人貿易と煎茶道(1996年)72頁。なお，第６章で後述の「和英語林集成(初版)」を加えれば７例となる。
　『歌舞伎台帳集成』では，「帰命曲輪文章」(安永９年，1780)に出てくる「きびせう」に「急須」と編者が当て字しているが相応しくない。漢字を当てるならば，「急尾焼」が妥当である。原文は「白湯でも涌かして置升ふト言い言いきびせうに炭取の炭をつぃで鼻紙にて煽ぐ」とあり，湯沸かしとして使用している。歌舞伎台帳研究会編『歌舞伎台帳集成』第41巻(2003年)309頁。
(15)　『日本随筆大成』第１期第１巻(1975年)242頁。
(16)　注13文献に同じ
(17)　天理図書館『ビブリア』第15号(1959年)65頁。中村幸彦『近世作家研究』(1971年)「上田秋成雑記」所収，243頁。
(18)　村瀬栲亭『芸苑日渉』巻12，国民図書(株)『日本随筆全集』第1巻(1927年)674頁。
(19)　注７森2000年『陶説』所収論文31～34頁。
(20)　扇浦正義「長崎出土の煎茶器について」板橋区立郷土資料館カタログ『長崎唐人貿易と煎茶道』(1996年)112・114頁。写真は，注７森『陶説』論文33頁と同じく注７森『煎茶とやきもの』論文110頁。
(21)　水田紀久・橋爪節也監修『木村蒹葭堂全集』第８巻(2015年)151頁図版14(蒹葭堂百二十五年忌出品図録)。
(22)　注７森達也愛知県陶磁資料館カタログ論文31頁，『陶説』論文109頁。
(23)　恒右衛門宛書状(文政10年４月10日)，木崎愛吉『大風流田能村竹田』第６

(1929年)145頁。この点は長谷川瀟々居氏がすでに指摘されていた。長谷川瀟々居『煎茶志』(1965年)112頁。

(24) 李新玲・任新来『大唐宮廷茶具文化』(2017年)104頁。同ページに掲載される元・銭選の「盧仝煮茶図」掲載のものも同類の可能性がある。『農業考古』1993年第2期(中国茶文化専号⑤)口絵。

(25) 注24『農業考古』口絵。大槻幹郎「隠元禅師と煎茶」(煎茶の起源と発展シンポジウム組織委員会編『煎茶の起源と発展シンポジウム発表論文集』所収, 2000年)85頁。

(26) 赤井達郎ほか編『茶の湯絵画資料集成』(1992年)284頁。

(27) 伴蒿蹊『近世畸人伝』巻二(寛政2年, 1790)(宗政五十緒校注『近世畸人伝・続近世畸人伝』東洋文庫202所収, 2004年)84頁。増山雪斎も図を記す。増山雪斎『煎茶式』(文化元年, 1804)(芸能史研究会編『日本庶民文化資料集成』第10巻所収, 1976年)193頁。浦上玉堂は絵画に描く。浦上玉堂「売茶翁画像」主婦の友社編『売茶翁集成』(1975年)70頁

(28) 愛知県陶磁資料館カタログ『煎茶とやきもの』(2000年)図版10。入間市博物館カタログ『煎茶伝来―売茶翁と文人茶の時代』(2001年)20頁。

(29) 森荊田宛書状(文政10年2月23日)。木崎愛吉『大風流田能村竹田』第6(1929年)134・135頁。

(30) 森達也「唐物煎茶器研究の新資料―最近発見の沈没船引揚遺物を中心に―」『陶説』581号(2001年)60～65頁

(31) 暁鐘成編『蒹葭堂雑録』巻1(安政3年, 1856)10葉ウラ。国民図書(株)編『日本随筆全集』第5巻(1928年)466・467頁。水田紀久・橋爪節也監修『木村蒹葭堂全集』第8巻(2015年)34頁。

(32) 長谷川瀟々居氏がすでに誤読であることを述べている。長谷川瀟々居『煎茶志』(1965年)113・114頁。

(33) 大阪府立中之島図書館蔵。蒹葭堂の用箋に書写される。(清)葉雋の『煎茶訣』の翻訳に自らの茶具の解説を加えたもの。引用部分は楽水居の加筆部。なお,『煎茶訣』は『浪速叢書』に影印を掲載する。浜松歌国(布屋清兵衛)「摂陽奇観」巻32の明和元年の条(1764)所収, 船越政一郎編『浪速叢書』第4(1927年)107～120頁。木村蒹葭堂の識語を伴う。

(34) 柳下亭嵐翠『煎茶早指南』(享和2年, 1802)(林屋辰三郎ほか編『日本の茶書2』東洋文庫206所収(1972年)258頁。

(35) 売茶東牛輯『煎茶綺言』巻1(万延元年, 1860)十一葉ウラ・十二葉オモテ(同文館編集局編『日本教育文庫』衛生及遊戯篇(1911年)466頁。

(36) 鳥居清・山下一海校注『中興俳諧集』古典俳文学大系13(1975年)252頁。

(37) 洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第19巻(1983年)314頁。

(38) 麻生磯次校注『東海道中膝栗毛』(日本古典文学系62, 1952年)328頁。

(39)　日本随筆大成編集部編『日本随筆大成』第１期第１巻(1975年)242頁。

(40)　『煎茶早指南』には，名古屋・富士見原の陶工の作る茶道具も「別に京師に求むるに及ばず」というレベルになっているが，急尾焼のみは「土に是非ある故，およばぬ所もあり。」と記す。注34文献258頁。

(41)　愛媛大学国語国文学研究室編文学資料集５『耳敏川』(愛媛大学文学資料集５，1992年)91・92頁。

(42)　大分県教育庁管理部文化課編『田能村竹田資料集著述編』(大分県先哲叢書，1992年)394頁。佐伯太「煎茶小史」(井口海仙ほか編『茶道全集』第13所収，1937年)690頁。

(43)　坂崎坦編『日本画談大観』下編(1917年)1306頁。早川純三郎編『田能村竹田全集』(1916年)26頁。

(44)　深田精一『木石居煎茶訣』乾(嘉永２年，1849)。入間市博物館カタログ『お茶と浮世絵』(1997年)17頁。

(45)　土瓶が架けられているまたは架けられていたと考えられる画像の例を挙げておく。急尾焼に比較して圧倒的に少ない。

・古河三蝶「寿御夢想妙薬」(天明４・５年，1784・85)，鈴木利平編『校訂黄表紙百種』(続帝国文庫，明治34年)351頁。

・歌川国長「楼上遊宴」(文化前期頃)。楢崎宗重編『秘蔵浮世絵大観』別巻(1990年)図版92。

・岡田玉山「女有職宝文庫」(文政元年，1818)，味の素食の文化センター蔵

・恋川春町「新形染松之薬種」(文政12年，1829)前編，国立国会図書館蔵

・黒川春村「草庵五百人一首」(天保４年，1833序)巻二，国立国会図書館蔵

・松亭金水「清談松の調」(天保12年，1841)二編巻一並びに三編巻上，早稲田大学図書館蔵

・南仙笑杣人「愚智太郎懲悪伝」(天保15年，1844)，早稲田大学図書館蔵

・一筆庵主人「其由縁鄙の俤」(弘化４年，1847)二編上冊，早稲田大学図書館蔵

・歌川芳晴(画)「若衆振由縁色揚」(嘉永３年序，1850)，国立国会図書館蔵

・為永春水「仮名読八犬伝」(嘉永３年，1850)９編下，早稲田大学図書館蔵

・五粽亭広貞「鏡山姿写絵」(嘉永５年，1852)。国際日本文化研究センター編『ナープルステク博物館所蔵日本美術品図録』(1994年)32頁図版192。阪急学園池田文庫編『上方役者絵集成』(2003年)105頁図版485。

・山東京山「春の文かしくの草紙」(嘉永６年，1853)七編上，国立国会図書館蔵

・柳煙亭種久「風俗浅間岳」(嘉永８年，1855)三編下冊，早稲田大学図書館蔵

・柳下亭種員「白縫譚」(安政２年，1855)19編下。佐藤至子『白縫譚』上

(2006年)502頁。

・歌川国貞「見立三十六句選(秋さくわかな姫)」(安政3年，1856)，東京都立図書館蔵

・為永春水「椿説鬼魅談語」(安政4年，1857序)二編下，早稲田大学図書館蔵

・柳下亭種員「童謡妙々車」五編上(安政4年，1857)早稲田大学図書館蔵

・歌川豊国「外題づくし，仮名手本不見高嶋本所浪宅の場」(俳優似顔東錦絵より，安政5年，1858)，国立国会図書館蔵

・笠亭仙果「根源実紫」(安政5年，1858)11編，早稲田大学図書館蔵

・上に同じ　十編上(安政6・7年，1859・60)早稲田大学図書館蔵

・為永春水「北雪美談時代加々見」(文久3年，1863)27編上，大阪府立中之島図書館蔵

・鶴亭秀賀「御所楼梅松録」(慶応2年，1866)八編下，国立国会図書館蔵

(46)　漢方薬―天明2年(1782)芝全交「絵本風雷神天狗落種」上冊(国立国会図書館蔵)

酒―文化3年(1806)式亭三馬「酩酊気質」巻之上。古谷知新編『滑稽文学全集』第6巻(1919年)325頁。小学館『新編日本古典文学全集』第80巻(2000年)206頁

文化7年(1810)式亭三馬「当世七癖上戸」巻之下。古谷知新編『滑稽文学全集』第41巻(1918年)27頁。松崎亜砂子「絵画資料にみる江戸の食生活」第21図(江戸遺跡研究会『食器にみる江戸の食生活』所収，2019年)205頁

天保11年(1840)八島五岳「絵本柳樽」初編12葉オモテ。太平書屋『画本柳樽全十編』(2008年)33頁

天保13年(1842)八島五岳「絵本柳樽」5編1葉オモテ。太平書屋『画本柳樽全十編』(2008年)195頁

(47)　西村2016では，18世紀の画像資料として転記ミスにより間違った資料を紹介した。重ねてお詫びして訂正しておきたい。

(48)　滝澤馬琴『傾城水滸伝』，『続帝国文庫』第26輯(1900年)所収

(49)　村上静人編『春色連理の梅・春色吾嬬の春雨・仕懸文庫』(人情本刊行会第25輯，1923年)141頁

(50)　臨川書店『普茶料理抄』(江戸時代料理本集成19-上，1978年)。吉井始子編『翻刻　江戸時代料理本集成』第4巻(1979年)239・240頁。

(51)　中村幸彦編『美術書集(二)』大東急記念文庫善本叢刊第15巻(1978年)496頁。池大雅筆『楽志論図巻』(梅沢記念館蔵)にも同類かと思われるものが焜炉の上に描かれるが，画像表現がいささか不鮮明である。注26文献175頁

(52)　京都国立博物館カタログ『日本人と茶』(2002年)251頁図版182

(53)　『神戸鹿峰翁遺愛品展観図録』(昭和2年)所収，佐々木丞平・正子編『古

画総覧』文人画系１(2006年)1027頁図版4787

(54)　稲垣正宏「17世紀の遺跡から出土する煎茶道具」，西村昌也編『東アジアの茶飲文化と茶業』(2011年，周縁の文化交渉学シリーズ1)所収205頁。

(55)　臨川書店『新編異国料理』(江戸時代料理本集成50，1978年)。吉井始子編『翻刻　江戸時代料理本集成』第10巻(1981年)285頁。

(56)　青木茂ほか校注『日本近代思想大系』第17巻(1989年)332頁。静岡大学ALL　ABOUT　TEA研究会編『日本茶文化大全』(2006年)95頁。浅川哲也『春色恋廼染分解　翻刻と総索引』(2012年)165頁。

(57)　成田涼子「江戸遺跡出土のどびん・急須」江戸遺跡研究会『食器に見る食生活』(2001年)67頁。

(58)　清談楼主人『新撰煎茶一覧』(弘化4年，1847年)43葉ウラ・44葉オモテ

(59)　注56浅川文献165頁。

(60)　注44歌川芳晴文献十五葉ウラ

(61)　(大坂)四宮仲宣「東牖子」巻４(国民図書株式会社編『日本随筆全集』第１巻，1927年)216・217頁。

(62)　橋口清『浮世風俗やまと錦絵』江戸末期時代上巻(1918年)第13葉

(63)　浜松歌国(布屋清兵衛)「摂陽奇観」巻32の明和元年の条(1764)，船越政一郎編『浪速叢書』第４(1927年)107～120頁。同じく巻43の享和３年の条，船越政一郎編『浪速叢書』第５(1928年)322頁。

(64)　天理図書館『ビブリア』第15号(1959年)59頁。中村幸彦『近世作家研究』(1971年)「上田秋成雑記」所収，233・234頁。

(65)　(大坂)陸可彦『素人包丁』二編(文化2年，1805)69葉。吉井始子『翻刻江戸時代料理本集成』第７巻(1980年)180頁。

(66)　小泉吉永編『江戸時代女性文庫』第45(1996年)頁数なし。(訳文)松下幸子『図説江戸料理事典』(1996年)350頁。

(67)　文政12年１月13日橋本元吉(竹下)宛書状，『頼山陽書翰集』下巻(1927年)198～199頁。矢部誠一郎『日本茶の湯文化史の新研究』(2005年)23～24頁。ちなみに，増山雪斎は上投法の烹茶をしている。注27増山書192頁。

(68)　注43に同じ

(69)　注13に同じ

(70)　『日本の名著』第33(1977年)174頁

(71)　斯邁爾斯著，中村正直訳『自助論(西国立志編)』(明治9年，1876)第13編44頁。

(72)　J.C.ヘボン「和英語林集成(初版)」(慶応3年，1867)200・212頁。「和英語林集成(再版)」(明治５年，1872)235・248頁。明治学院大学図書館―和英語林集成デジタルアーカイブスより。

(73)　田島象二『商業小学取引要文』(明治8年，1875年)42葉ウラ・50葉オモテ

(74)　「おかつ女房の打扮にて茶盆へ菓子鉢と急須茶碗を載せ持て出来たり…」河竹繁俊『日本戯曲全集』(1930年)第31巻380頁。
(75)　内藤官八郎「弘藩明治一統誌月令雑報摘要抄」(明治30年頃，1897頃)(谷川健一ほか編『日本庶民生活資料集成』第12巻所収，1971年)292頁。
(76)　日本浮世絵協会編カタログ『オランダライデン民族学博物館所蔵シーボルトコレクションを中心とした浮世絵展』(1976年)図版52
(77)　人情本刊行会「人情本集」(『日本名著全集』第1期第15巻所収，1928年)100・101頁。
(78)　国立国会図書館蔵
(79)　佐藤要人『江戸水茶屋風俗考』(1993年)74・75頁，国立国会図書館
(80)　神奈川県立歴史博物館カタログ『浮世絵江戸名所七変化』(2004年)80頁図版146。江戸東京博物館カタログ『浮世絵から写真へ』(2015年)16頁図版８。
(81)　日本浮世絵協会編カタログ『オランダ国立ライデン民族学博物館所蔵シーボルトコレクションを中心とした浮世絵展』(1976年)図版56。注75佐藤文献口絵
(82)　大阪府立中之島図書館・九州大学付属図書館(松浦コレクション)蔵
(83)　「茶出しに唐茶摘込む」近松門左衛門「博多小女郎波枕」(『近松浄瑠璃集』上所収，日本古典文学大系，1958年)326頁。
　「茶出しで一森入れてこい」(一森は茶の銘柄)近松半二「いろは蔵三組盃」(小沢愛圀校訂『忠臣蔵浄瑠璃集』所収，帝国文庫第11編，1929年)480頁。